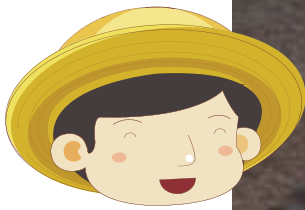


2012年4月

民俗 — No. 4

けんぱくものしりシート

せん ば こ 千 歯 扱 き



こちら側がわに立たつよ。

稲穂いなほをはさんで、脱穀だっくします。

歯はがたくさん並ならんでいるよ。

鉄製品てつせいひんをつくる“かじ屋やさん”が歯はを、ほかのところは“大工だいくさん”が作りつくます。

「千歯扱き」は、稲穂いなほからもみを脱穀だっく（穂ほからとる）する道具どうぐです。“たくさんはの歯はがついている”または、“一度いちどに千把せんわ（千束せんたば）も扱こくことができる”ことから「千歯扱き」といわれています。江戸時代えどじだいの元禄年間げんろくねんかん（1688～1704年）に発明はつめいされ、明治時代めいじじだい（1868～1912年）までさかんに使つかわれていました。大阪おおさかで大工だいくさんが作りつくった物ものを見た佐平さへいという人ひとが、作り方つくかたの技術ぎじゆつを鳥取県倉吉とっとりけんくらよしにも持ち帰もり広めかえひろめたといわれています。

つかかた 使い方

稲穂を齒の間にはさんで手前に強く引くと、もみが落ちるしくみになっています。昔は、竹製の2本の箸のカラハシ（唐箸）を使っています



カラハシ（唐箸）

だが、1度に脱穀できる量は少ないのでとても大変な作業でした。千歯扱きは、1度の脱穀でカラハシの約3～10倍の量を脱穀できました。

とても便利な「千歯扱き」の登場は、それまで脱穀作業で収入を得ていた後家（旦那さんを亡くした女性）さんたちの働く場所を奪ってしまったため、別名「後家倒し」と呼ばれています。

だっこくどうぐ 脱穀道具のうつりかわり

弥生時代は、石包丁で実った穂をつむ「穂つみ」をしていました。やがて、稲の根本から刈り取る「根刈り」が行われるようになると、脱穀の道具が必要になりました。大正時代（1912～1926年）に足踏脱穀機が広まると、千歯扱きは徐々に使われなくなりますが、種もみを取る時にだけ使う農家もありました。また、昭和50年代（1975～1985年）になると、1台で3役（刈り取り・脱穀・袋詰め）をこなすとっても便利なコンバインが登場します。



あしぶみだっこくき
足踏脱穀機

※石包丁…くわしくは、【けんぱくものしりシート考古No.2】をみてね。

参考にした本 『写真でみる 日本生活図引 1 たがやす』 弘文堂 1989年

『日本の年中行事百科 民具で見る日本人のくらしQ&A 5』 河出書房新社 1997年 他

らいげつ がつ
来月（5月）の
けんぱくものしりシートは
げんせい せいぶつ
現勢・生物-4だよ！
おたのしみに！



もっちゃん



岩手県立博物館

〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷 34
Tel. 019-661-2831 Fax. 019-665-1214
<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/>